

南あわじ市沼島方言のアクセントの2単位形¹

中澤 光平

koheinakk@12.alumni.u-tokyo.ac.jp

キーワード： 沼島方言 アクセント 2単位形 複合語 古態

要旨

本稿の目的は、兵庫県南あわじ市沼島（ぬしま）方言のアクセントについて2単位形を中心に記述することである。沼島方言のアクセント体系は、高起式と低起式の2式および下げ核で解釈され、淡路島方言と同様に中央式に属するが、沼島方言には淡路島方言を含む他の中央式諸方言には見られない2単位形が存在する。この2単位形は共時的には体系上不均衡だが、通時的に中央式の古い段階のアクセントの残存と考えられる。本稿では沼島方言に見られる2単位形として、1. 助詞・助動詞のアクセント、2. 副詞のアクセント、3. 複合語のアクセントの3つを扱う。はじめに筆者の調査データを示し、共時的な解釈を行った後に、通時的な位置付けについて考察する。最後に、これら3つの分析を通じて、沼島方言の中央式における系統的な位置付けについて考察する。

1. 本稿の目的

本稿では、兵庫県南あわじ市の沼島（ぬしま）で話される沼島方言のアクセント体系を、筆者の現地調査によるデータを基に記述し、中央式諸方言（上野善道 1987: 16）における系統上の位置付けについて論じる。

沼島は、淡路島の南4.6kmに浮かぶ、兵庫県南あわじ市（旧緑町、三原町、西淡町、南淡町）に属する島であり、沼島方言は地理的にも（淡路島で話される）淡路島方言と1つの方言区画を為すと考えられる。

一方で、沼島方言には淡路島方言と異なる特徴も存在する。本稿では特に、淡路島方言を含む中央式諸方言には見られない2単位形を中心に記述し、その共時的な解釈と通時的な説明を試みる。



図1 淡路島および沼島の位置

¹ 本稿は、日本方言研究会第96回研究発表会と日本語学会2013年度春季大会での口頭発表およびその原稿集、予稿集の内容を基に加筆、修正したものである。

2. 調査方法および沼島方言の概要

2.1 調査内容

話者は沼島生え抜きの以下の2名である。

故 青石協（あおいし ひろむ）さん（1930 生まれ男性）（主な話者）

福田豊子（ふくだ とよこ）さん（1942 年生まれ女性）

調査方法は1対1の調査票読み上げ方式で、調査期間は2012年10月～2014年6月に断続的に行った。

2.2 沼島方言の概要

沼島方言の諸特徴について簡略に記述する。

- (1) a. 「セ」, 「ゼ」はそれぞれ[je], [(d)ʒe]に近く発音される。
 - b. 淡路島方言の一部に見られるガ行, ダ行の前鼻音は沼島方言にはない。
 - c. 淡路島方言で広く用いられる「ナへ」《何故》は沼島方言では用いない。
 - d. 「が, は」の融合形²は淡路島南部の型と共通する。
 - e. 淡路島方言に見られる一段動詞の五段化は沼島方言には見られない。

3. 沼島方言のアクセント

沼島方言のアクセント体系は現代京都方言と同様で、中央式諸方言に属する。

- (2) a. 高起式と低起式の2式を有する。
 - b. 下げ核³を有する。（以下、下げ核を単に「核」と呼ぶ）

高起式をH、低起式をLで表し、核が語頭から何拍目にあるかを数字で表す（無核は0とする）。核の位置を語末から数える場合は数字の前にマイナス「-」を付ける。

高起式は核が無い限り文節の頭から（自然下降を伴って）高く続く。低起式は低く始まり、後に上昇する。低起式の上昇位置は 3.3 で後述するように核の有無と語構成で自動的に定まる。

3.1 助詞・助動詞の2単位形

本節では助詞・助動詞に見られる2単位形を扱う。

3.1.1 「じゃ」のアクセント

中央式では低接⁴することが多い助動詞「じゃ」⁵が、沼島方言では無核語に付く場合に、「丘

² 「座布団が（破れているよ）」[dzabutoŋa (jaburetorā)]のような形式を指す（中澤 2011）。

³ 次の拍を下げる働きを持つ（上野 1992: 11）。拍はアクセントの長さを構成する単位（上野 2006: 2）であり、沼島方言では特殊拍（ッ、一、ン、二重母音のイ）も核を担うためモーラと一致する。

(オカ.H0)じゃ」(HH-F, *HH-L), 「針(ハリ.L0)じゃ」(LL-F, *LH-L)となる(Hは高, Lは低, Fは下降調。*は沼島方言で不適な形。-は形態素境界)。有核語に対しては「音(オト.H1)じゃ」(HL-L, *HL-F), 「雨(アメ.L2)じゃ」(LH-L, *LF-F)と低接(あるいは順接⁶)する。3拍以上の語でも同様で、無核の「車(クルマ.H0)じゃ」(HHH-F, *HHH-L), 「鼠(ネズミ.L0)じゃ」(LLL-F, *LLH-L)に対して、「娘(ムスメ.H2)じゃ」(HHL-L, *HHL-F), 「心(ココロ.H1)じゃ」(HLL-L, *HLL-F), 「狸(タヌキ.L2)じゃ」(LHL-L, *LHL-F)となる。

一方で、タ形(過去形)では「丘じゃった」(HH-HL-F), 「音じゃった」(HL-LL-F), 「針じゃった」(LL-HL-F), 「雨じゃった」(LH-LL-F)のような音調が観察された。すなわち、「た」が常にFで実現し、低ピッチ(L[...])を挟んで高い部分が2か所分かれて現れる。沼島方言のアクセントを京都方言(中井2002:278)と対照して表1に示す(京都は「じゃ」ではなく「や」)。

表1 「じゃ」、「じゃった」のアクセント対照

		「-じゃ」		「-じゃった」		語例
		京都	沼島	京都	沼島	
無核語	2拍H0	HH-L	HH-F	HH-LL-L	HH-HL-F	丘(オカ)
	2拍L0	LH-L	LL-F	LH-LL-L	LL-HL-F	針(ハリ)
有核語	2拍H1	HL-L	HL-L	HL-LL-L	HL-LL-F	音(オト)
	2拍L2	LH-L~LF-L	LH-L	LH-LL-L~LF-LL-L	LH-LL-F	雨(アメ)
無核語	3拍H0	HHH-L	HHH-F	HHH-LL-L	HHH-HL-F	車(クルマ)
	3拍L0	LLH-L	LLL-F	LLH-LL-L	LLL-HL-F	鼠(ネズミ)
有核語	3拍H1	HLL-L	HLL-L	HLL-LL-L	HLL-LL-F	心(ココロ)
	3拍H2	HHL-L	HHL-L	HHL-LL-L	HHL-LL-F	庭師(ニワシ)
	3拍L2	LHL-L	LHL-L	LHL-LL-L	LHL-LL-F	苺(イチゴ)
	3拍L3	LLH-L~ LLF-L	LLH-L	LLH-LL-L~ LLF-LL-L	LLH-LL-F	燐寸(マッチ)

高い部分が2か所分かれて現れるため、「-じゃった」の音調は共時的に2単位形と解釈されることになるが、アクセント単位の切れ目(+で表す)の位置が問題となる。有核の場合は「じゃった」が1つのアクセント単位になると見て「音+じゃった」(HL+LL-F), 「雨+じゃった」(LH+LL-F)と切れるが、無核の「丘じゃった」(HH-HL-F), 「針じゃった」(LL-HL-F)は同じ位置で切ることはできず、「丘じゃ+た」(HH-HL+F), 「針じゃ+た」(LL-HL+F)⁷と分けることに

⁴ 無核の語には低く付き、有核の語でも核に従って下がって行く(中井2002:43)。

⁵ 方言によっては「や」や「だ」(とその活用形)が無標となる。また、沼島方言では、言い切りの場合には終助詞「じょ」(<*「じゃ+わ」?アクセントは「じゃ」と同じ)を普通は用いる。

⁶ その助詞が付く語のアクセントを変えずにそのまま付くこと(中井2002:43)。

⁷ 「丘じゃ+た」(HH-HL+F), 「針じゃ+た」(LL-HL+F)と分けることもできるが、促音から始まるアクセ

なる。有核の場合も「+た」で切り、「音じゃっ+た」(HL-LL+F)、「雨じゃっ+た」(LH-LL+F)とすれば全て「-じゃっ+た」となり統一が取れるが、他方で単純動詞のタ形では「た」がアクセント上独立しない(表2)。

表2 単純動詞のタ形のアクセント

寝た	H-L (H1)	倒れた	HHL-L (H2)	降りた	LH-L (L2)
入れた	HL-L (H1)	喜んだ	HHLL-L (H2)	読んだ	LL-F (L3)
選んだ	HLL-L (H1)	働いた	HHHL-L (H3)	遊んだ	LHL-L (L2)

音調の後の()に記したように、タ形全体が1アクセント単位となる。「じゃった」と同じく「ッた」となる場合でも、「寄った」(HØ-L, H1)、「居った」(HØ-L, H1)、「取った」(LL-F, L3)、「凍った」(HHØ-L, H2)、「入った」(LHØ-L, L2)、「謝った」(HHLL-L, H2)、「遮った」(HHHØ-L, H3)、「加わった」(LLHØ-L, L3)と単純動詞ではやはりアクセント上独立しない⁸。

3.1.2 一部の助動詞のアクセント

「じゃ」以外のいくつかの助動詞でも2単位形が見られる。ここでは、「よる」と「せん・へん」の2単位形を取り上げる。

(3) 「飛びよる」(HL-HL)、「消しよる」(HL-HL)、「登りよる」(HHL-HL)、「育ちよる」(HLL-HL)、「示しよる」(HLL-HL)、「遊びよる」(LHL-HL)

動詞語幹が3モーラ以上だったり「よる」が音韻的に融合したりすると、「歩っきよる」(LHØ-LL)、「捕まりよる」(LLHL-LL)、「喜びよる」(HHLL-LL)と重起伏が見られなくなる。

否定の助動詞「せん、へん」では(4)のような形が現れる。

(4) オケヘン「置かない」(HL-LH)、「オレヘン」折らない」(LH-LH)、「ノボリヤセン」登らない」(HHL-LH)、「ソダチャセン」育たない」(HLL-LH)、「カクシャセン」隠さない」(LHL-HH)

3.1.3 一部の助詞のアクセント

助詞の一部にも2単位形が見られる。

(5) a. 「葉さえ」(HL-HL)、「山さえ」(HL-HL)、「鯨さえ」(LHL-HL)

ント単位が不自然なことで、形態素境界とアクセント単位の切れ目を極力一致させるという方針を本稿では採用することから、このような分け方を積極的に考慮することはしない。

⁸ 促音を含む音節に核がある場合、促音自体は高く聞こえるが、体系的には促音の前に核があると見た方がよい。この場合の促音のピッチをØで表す。ただし、「無核語+じゃった」では「じゃっ」と「た」がともに核を持ち、「-じゃった」(HØF)としては下がり目のないHHFと紛らわしいためHLFとLで表記する。この促音は音韻的なものだが、形態的な融合で生じた音声的な促音では○]ッと○ッ]の対立が生じることがある(中澤2013)。

- b. 「葉でも」(HL-HL), 「山でも」(HL-HL), 「鯨でも」(LHL-HL)
- c. 「葉しか」(HL-HL), 「山しか」(HL-HL), 「鯨しか」(LHL-HL)
- d. 「雨さえ」(LH-LL), 「雨でも」(LH-LL), 「雨しか」(LH-LL)

ただし、助詞の2単位形は沼島方言だけでなく淡路島方言を含め他の中央式諸方言にも見られる(中井 2002: 276-277)。

3.2 副詞のアクセント

ここでは、副詞の中でも、2モーラの繰り返しである4拍の畳語(連濁するものを含む)を取り扱う。

沼島方言では、4拍の畳語「XX (-と)」(連濁するもの含む)はHLHL-Lという2単位形が基本だが(「と」は低接)、この形は淡路島方言を含め他の方言にも見られる(中井 2002: 40)。また、一般にHLHL-L~HLML-L~HLLL-Lという連続体を為す(Mは中ピッチ)。

一方、沼島方言ではHLHL-L以外のアクセントを取るものがある。助詞「と」(低接)を伴い得るもののうち和語に限定して今までに調査した語を(6)に挙げる。

- (6) a. HHLL(-L) 黒々(くろー), 寒々(さむー), 白々(しろー), 高々(たかー)(HHLHも), つくづく(HHLHも), 広々(ひろー)(HHLHも)
- b. HHLH(-L)~HHLM(-L) 青々(あおー)(ok), 赤々(あかー)(ok), 軽々(かるー)(ok), 暗々(くらー), 細々(こまー), さえざえ, さめざめ(HHHHも), しみじみ, 白々(しらー), 高々(たかー)(HHLLも), つくづく(HHLLも), 長々(ながー)(ok), なみなみ(HHHHも), 早々(はやー)(ok), 遥々(はるー)(ok), 晴れ晴れ(はれー)(ok), 冷え冷え(ひえー), 広々(ひろー)(HHLLも), 深々(ふかー), 細々(ほそー), 仄々(ほのー), ほればれ, まざまざ(HLHLも)
- c. HHHH(-L) さめざめ(HHLHも), なみなみ(HHLHも), のうのう, 丸々(まるー)(ok)
- ((ok)は累計3回以上確認してその形しか出なかったもの)

頻度は異なるものの、相互の併用形がかなり見られ、語彙的に対立するかは現時点では不明ではあるが、音調としては(5)の3つがHLHL(-L)以外に観察され、かつHLHL(-L)と併用されるものが「まざまざ」1例を除いて見られない。

(6)のうち、HHLL(-L)とHHHH(-L)はそれぞれH2とH0の1単位形で問題ないが、HHLH(-L)~HHLM(-L)は2単位形となる。2拍の繰り返しであるから、HH+LH(-L)~HH+LM(-L)と切るのが最も自然だろう。しかしこの場合、前部(HH-)と後部(LH-L)で式が異なることになる。4拍の畳語の基本形HL+HL(-L)(H1+H1)のように、2単位形として自然なのは同じ型の繰り返しであり、文献でも「日本書紀」歌謡に見られる「ハロハロに」(LH+LH-H)(鈴木編 2003: 385)と

いう例がある。これに対して、HHLH(-L) ~ HHLM(-L)は H0+L0 と解釈され、前部と後部で式が異なるため不自然な型となる。それにも関わらず、基本形以外の型では 1 単位形のほかの 2 つよりも多く現れ、無標な型となっているのは共時的には動機づけがたい。低接する「と」の作用で HHLH(-L) ~ HHLM(-L)となっている可能性については、「ちゅー」 < 「*と+言う (H0)」を 4 拍 H2 の名詞に後続させても HHLL チュー (*HHLH チュー, *HHLM チュー) であることから否定される。

3.3 複合語のアクセント

本節では、複合名詞、複合動詞、複合形容詞のアクセントを扱う。

3.3.1 複合名詞のアクセント

沼島方言の低起式の上昇位置は、京都方言 (中井 2002: 12-14) などと同様、核があればその直前で、なければ文節末で上昇する (L0 の文節末の上昇は、次に高起式の語が続く場合には消失する)、いわゆる「遅上り」を基本とし、(L0 に高起式の文節が続く場合を除き) 低起式の語は 1 拍だけ高い形 (一拍卓立) を取る。

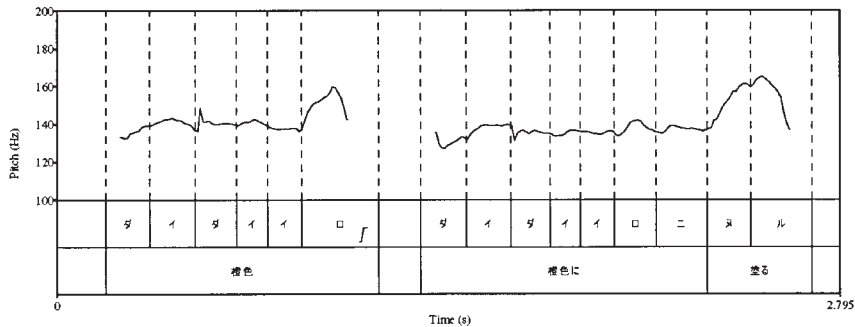


図2 「橙色(L0), 橙色に塗る(L0+H0)」のピッチ曲線

これに対して、5 拍以上の低起式の複合名詞では、(7)のように核の位置は同じだが上昇位置が異なる複数の音調型が現れる。

- (7)
- | | | |
|--------|--------|-------------------------------|
| 5 拍 L4 | LLLHL | 苺狩り, 狐蕎麦, 子守唄, 狸蕎麦, 手長猿, ... |
| | LLHHL | 運任せ, 鯉幟, 粉薬, 春祭り, 盆踊り, ... |
| 6 拍 L4 | LLLHLL | 遊び心, 狸寝入り, 紫芋, 紋白蝶, 和歌山県, ... |
| | LLHHLL | 糸鋸, さやえんどう, 生クリーム, ... |
| 6 拍 L5 | LLLLHL | ガラガラ蛇, 筍掘り, 自動車事故, 飛行機雲, ... |
| | LLLHHL | 苺畑, 将棋倒し, 盥回し, 坊主頭, 昔話, ... |
| | LLHHHL | 食べ放題, 飲み放題, フンコロガシ, ... |

- 7拍 L5 LLLLHLL 井戸端会議, 堪忍袋, 無いものねだり, ...
 LLHHHLL 蕎麦アレルギー, ...
- 7拍 L6 LLLLLHL 中華料理屋, 待ち合わせ場所, ...
 LLLLHHL お転婆娘, 玉葱畑, 早口言葉, 貧乏揺すり, ...
 LLLHHHL たらこ唇, ...
- 8拍 L6 LLLLLHLL 太平洋側, 北海道産, ...
 LLLLHHLL グレープフルーツ, コーヒーフレッシュ, ...
 LLLHHHLL 国語大辞典, ...

上昇位置の違いは複合名詞の語構成を反映している。ここで、複合語Zは前部要素Xと後部要素Yの2要素から成り立つと考える(上野善道 1997: 233)。Xに核がある場合は一拍卓立となり、Yに核がある場合はYの前で上昇が生じる。このように、語構成によって上昇位置が自動的に定まるため、下がり目のみが発別的だと判断して「声変わり」コエ[ガワ]リは「手長猿」テナガ[ザ]ルと同じくL4と解釈できる。

Yの前での上昇はYの長さに関係なく起こるため、「軍物語」イクサ[モノガタ]リ、「イソップ物語」イソップ[モノガタ]リのように4拍高くなる例もある。

一方で、無核の場合は(8)のように境界での上昇が生じない。

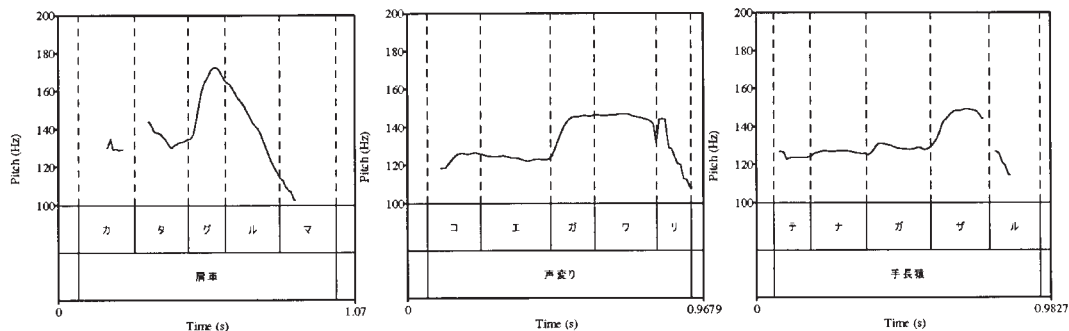


図3 「肩車(L3), 声変わり(L4), 手長猿(L4)」のピッチ曲線比較

Yの前での上昇はYの長さに関係なく起こるため、「軍物語」イクサ[モノガタ]リ、「イソップ物語」イソップ[モノガタ]リのように4拍高くなる例もある。

一方で、無核の場合は(8)のように境界での上昇が生じない。

- (8) 「針金」ハリガ[ネ], 「高望み」タカノゾ[ミ], 「食べ残し」タベノコ[シ], 「隠し事」カクシゴ[ト], 「親子連れ」オヤコズ[レ], 「只働き」タダバタラ[キ], 「三階建て」サンガイダ[テ], 「重箱読み」ジューバコヨ[ミ], 「成り上がり者」ナリアガリモ[ノ]
 また、Xが1拍の場合も(9)のように一拍卓立となる。

- (9) 「お下がり」オサ[ガ]リ, 「おしゃべり」オシヤ[ベ]リ, 「おにぎり」オニ[ギ]リ, 「おしぼり」オシ[ボ]リ, 「お気の毒」オキノ[ド]ク, 「酔海鼠」スナ[マ]コ, 「茶畑」チャバ[タ]ケ, 「火曜日」カヨ[ー]ビ, 「土曜日」ドヨ[ー]ビ, 「寿老人」ジュロ[ー]ジン

(8), (9)から, 低起式における(7)のような複合名詞の形態素境界での上昇は, Yに核がありかつXが2拍以上あることが条件と推測される。

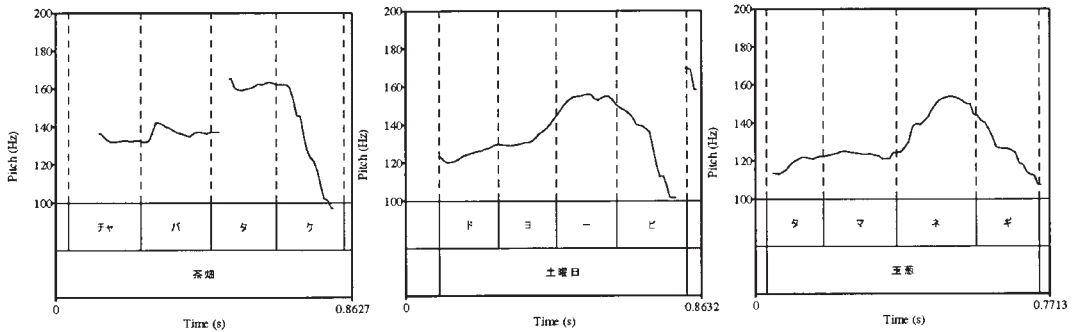


図4 「茶畑(L3), 土曜日(L3), 玉葱(L3)」のピッチ曲線

3.3.2 複合動詞のアクセント

「名詞(あるいは準名詞) + 動詞」型の複合動詞では, 単純動詞と同じく H0, L0, H-3 のアクセント型が基本である。

- (10) a. H0 泡立つ, 高鳴る, 近寄る, 欲張る, 物語る, 上回る, ...
 b. L0 汗ばむ (, ...)
 c. H-3 背負う, 火照る, 目指す, 頑張る, 頬張る, 若返る, ...

一方で, この基本形からはみ出て2単位形になる例もある。

- (11) 傷つく(HH-LH), 傷ついた(HH-LLF), 夢見る(HL-LH), 夢見た(HL-HL), 年取る(HL-LH), 年取った(HL-LLF), 鞭打つ(HL-LH), 鞭打った(HL-LLF), 脈打つ(HL-LH), 脈打った(HL-LLF), 傷つける(HH-LLH), 傷つけた(HH-LHL), 恰好つける(HØLL-LLH), 「恰好つけた」(HØLL-LHL)

(11)は動詞を構成する形態素の単独形のアクセントと一致する(傷 HH, つく LH, ついた LLF)ことから, 元のアクセントを保持した2単位形と言える。

「動詞+動詞」型の複合動詞では, 複合名詞で見たような低起式におけるXとYの間での上昇が有核でも生じない。

- (12) 「持ち歩いた」モチア[ル]イタ, 「食い散らかした」クイチラ[カ]シタ, 「すっ転んだ」スッコ[ロ]ンダ, 「酔っぱらった」ヨッパ[ラ]ッタ

一方, (13)は一見境界で上昇しているように見えるが, (14)と合わせると, (13)は L0+H-3 の 2 単位形と解釈した方が良い。(14)は(「立ち塞がる」以外) L0+H0 である。

- (13) 「掻き集めた」カキ[アツ]メタ, 「歩き疲れた」アルキ[ツカ]レタ, 「隠し続けた」カクシ[ツ]ズ[ケ]タ, 「歩き回った」アルキ[マワ]ッタ, 「立ち塞がった」タチ[フサガ]ッタ

- (14) 「掻き集める」カキ[アツメル], 「歩き疲れる」アルキ[ツカレル], 「隠し続ける」カクシ[ツ]ズケル, 「歩き回る」アルキ[マワル], 「立ち塞がる」タチフサガ[ル]

この 2 単位形は X が 3 拍以上ないと安定せず, X が 2 拍の場合, 「持ち歩く」モチアル[ク], 「食い散らかす」クイチラカ[ス], 「立ち塞がる」タチフサガ[ル]のように 1 単位形になっているものや, 「駆け回る」カケ[マワル~カケマワ]ルのように揺れているものがある。複合名詞とは性質が異なるが, X が短いと単純語に音調が近くなるという点, また「立ち塞がる」のように, 核の有無が条件に関わる点が複合名詞と類似している。

- (15) 立ち向かう」タチムカ[ウ:「立ち向かった」タチ[ムカ]ッタ, 「取り囲む」トリカコ[ム:「取り囲んだ」トリ[カコ]ンダ, 「降り始める」フリハジメ[ル:「降り始めた」フリ[ハジ]メタ, 「取り扱う」トリアツカ[ウ:「取り扱った」トリ[アツカ]ッタ

3.3.3 複合形容詞のアクセント

形容詞でも, 基本形からはみ出るものが少数ながら見つかっている。

- (16) a. 罪深い(LL-HHL), 罪深かった(LL-LHLLL), 肌寒い(LL-HHL), 肌寒かった(LL-LHLLL), 数少ない(LL-HHHL), 数少なかった(LL-HHHLLL~LL-LLHLLL)
b. 手広い(H-HHL~L-LHL), けち臭い(LL-LHL), 耐えがたい(LL-LHL), 読みづらい(LL-LHL), あほらしい(LL-LHL), 恩着せがましい(LLLL-LLHL)

形容詞はその語構成にかかわらず, 多くの場合単純語と同じアクセントになるようである(3 拍では H1, 4 拍以上では H-2 または L-2 が基本形)。しかし一部の低起式の語では, 形態素境界での上昇が生じている。「罪深い」や「肌寒い」では連濁が起きていること, 「罪(L0)+深い(H1)」や「肌(L0)+寒い(H1)」のアクセントと同じではないこと, 「タ形」では境界での上昇がないことなどから(16a)が二語の連続ではなく一語化していることは確かである。ただし, (16b)との違

いから、アクセント上は「罪深い」(LL-HHL)などを2単位形として扱う必要がある。

4. 沼島方言の2単位形の通時的説明

本節では、3節で見てきた2単位形の成立に関する通時的な説明を試みる。

4.1 助詞・助動詞の2単位形の通時的説明

「じゃ」は通時的に「*-で+ある」に由来する。ル形の「じゃ」は無核の「ある」(L0)が「で」と形態的に融合する過程でアクセント上自立性を失い1単位形となった(-H+LH > -HLH > -HR > -HL > -F, -L+LH > -LLH > -LR > -LL > -L)が、タ形の「じゃった」では有核の「あった」(L3)の自立性が融合後も残ったため、「*ジャーッタ」>「じゃった」のモーラ数の減少に伴ってHLL-F > HL-F, LLL-F > LL-Fとなった以外はアクセント上ほとんど変化しなかった一方で、形態的な融合によりアクセント単位の切れ目に不一致が生じた。

淡路島方言を含む他の中央式諸方言では、*LH-F > LH-L, *LHH-F > *LHH-L > LLH-Lと変化して「じゃ」が低接になったと考えられる。通時的にも、形容詞語尾「-し」、「-き」(>「-い」)や助詞「も」などで同様の変化が生じたと推定されている。これは、沼島方言の低起式が、現在の遅上りになる前の早上り(LH[...])の段階で分岐した可能性を示す⁹。

表3 「じゃ」のアクセントの成立過程

	*-で+ある	*-デア	(*-ジャー)	-じゃ	語例
2拍 H0	*HH-H+LH	*HH-HR > *-HL	*HH-HL	HH-F	丘(オカ)
2拍 L0	*LH-H+LH	*LH-HR > *-HL	*LH-HL	*LH-F > LL-F	針(ハリ)
2拍 H1	*HL-L+LH	*HL-LR > *-LL	*HL-LL	HL-L	音(オト)
2拍 L2	*LH-L+LH	*LH-LR > *-LL	*LH-LL	LH-L	雨(アメ)
3拍 H0	*HHH-H+LH	*HHH-HR > *-HL	*HHH-HL	HHH-F	車(クルマ)
3拍 L0	*LHH-H+LH	*LHH-HR > *-HL	*LHH-HL	*LHH-F > LLL-F	鼠(ネズミ)
3拍 H1	*HLL-L+LH	*HLL-LR > *-LL	*HLL-LL	HLL-L	心(ココロ)
3拍 H2	*HHL-L+LH	*HHL-LR > *-LL	*HHL-LL	HHL-L	娘(ムスメ)
3拍 L2	*LHL-L+LH	*LHL-LR > *-LL	*LHL-LL	LHL-L	狸(タヌキ)

⁹ 沼島方言は、他の中央式諸方言が早上りの段階で共有している「じゃ」の*...H-F > ...H-Lという改新を共有しておらず、早上りの段階で他の中央式諸方言と分岐したと見ることが出来る(「じゃ」より古い段階で生じた助詞「も」や形容詞語尾「い」の*...H-F > ...H-Lは沼島方言でも生じている)。その場合、「じゃ」で*...H-F > ...H-Lの改新が起きている淡路島方言との系統関係が問題となる。「じゃ」のアクセント変化が系統関係に関わりなく起きた変化であれば、沼島方言が淡路島方言と系統的に近いと考えることの妨げにはならないが、中央式諸方言における沼島方言の位置付けには利用できないことになる。

表4 「じゃった」のアクセントの成立過程

	-で+あつ-た	(-ジャー-ツ-タ)	-じゃつ-た	語例
2拍 H0	*HH-H+LL-F	*HH-H(+LL)-F	HH-HL+F	丘 (オカ)
2拍 L0	*LH-H+LL-F	*LH-H(+LL)-F	*LH-HL-F > LL-HL+F	針 (ハリ)
2拍 H1	*HL-L+LL-F	*HL-L(+LL)-F	HL-LL+F (or HL+LL-F)	音 (オト)
2拍 L2	*LH-L+LL-F	*LH-L(+LL)-F	LH-LL+F (or LH+LL-F)	雨 (アメ)
3拍 H0	*HHH-H+LL-F	*HHH-H(+LL)-F	HHH-HL+F	車 (クルマ)
3拍 L0	*LHH-H+LL-F	*LHH-H(+LL)-F	*LHH-HL-F > LLL-HL+F	鼠 (ネズミ)
3拍 H1	*HLL-L+LL-F	*HLL-L(+LL)-F	HLL-LL+F (or HLL+LL-F)	心 (ココロ)
3拍 H2	*HHL-L+LL-F	*HHL-L(+LL)-F	HHL-LL+F (or HHL+LL-F)	娘 (ムスメ)
3拍 L2	*LHL-L+LL-F	*LHL-L(+LL)-F	LHL-LL+F (or LHL+LL-F)	狸 (タヌキ)

(3)は「よる」+「ヨル」という独立したアクセント単位を持つ2単位形だが、通時的には本動詞「居る(おる)」(H1)との複合動詞に由来する。(4)も同様に「へん」+_へん=と解釈するが、通時的には「せぬ」(H0)に由来し式が異なる¹⁰。助動詞でも、「とる」は「飛んど」る、「破れ」とる」と連用形無核型に接続し、全体をH-2、L-2の1単位形と見ることができる¹¹。「とく」は「並べとく」、「隠しとく」と共時的に完全に1単位形の音調になる¹²。

4.2 副詞の2単位形の通時的説明

2単位形としては不自然なHHLH(-L)~HHL(-L)が無標であるのは、通時的におそらく無標な型だった*LLLHから*LLLH-L>HHLH-Lと変化したためと推定する。数は少ないが、「丸々」や「のうのう」のようなHHHH<*HHHHと、*LLLHと対を為すと思われる型があること¹³、また「目の前」H-H+LFなどに*L-L+LF>H-H+LFが想定されることが傍証となる。4.1の主張に基づけば、無核のL0が自立性を保つのは困難なはずだが、低接の「と」に支えられて残存したものだろう。「と」は新たに直前を隆起させる力は持たない(cf.「チュー」)が、すでに存在する隆起を保つ力は備わっていることになる(*LLLH-L>HHLH-L≠HLLL-L)。ただし、少数あるHLLL(-L)はHHLH(-L)から1単位化したものだろう(この型は淡路島南部の三原にも若干見られる)。淡路島の他の地域ではさらにHLLL-L>HLLL-Lと変換し、HLHL(-L)と合流したと推定される。

¹⁰ 恐らく「折れはせぬ」オ[レ]ワ[セヌ>オ[リヤ]-[セン>オ[レ]]へん>オ[レ]へん という変化を中心に高起式から変化したと考えられ、カ[ク]シャ[セン]などで部分的に元の高起式の音調が出るものと思われる。

¹¹ 通時的には「*て-居る(H1)」に由来し、共時的にH0+H1、L0+H1(=トルH1)の2単位形とも解釈できる。

¹² 通時的には「*て-置く(H0)」に由来し、「*隠して[[おく]>カクシト[ク]という変化が想定される。

¹³ 平安時代の4拍動詞の連体形における高起式と低起式のHHHH(例:聞こゆる)vs.LLLH(例:響もす)のような対立も参考になる(2拍動詞ではHH vs. LH, 3拍動詞ではHHH vs. LLH)。

4.3 複合語の2単位形の通時的説明

沼島方言の複合名詞の低起式に見られるアクセントは厳密に言うと2単位形ではないが、形態素境界で上昇する点は他の複合語の2単位形に類似する。

通時的に、低起式は(17)のように変化したと推定される(中井他 1999: 6, 上野 1985: 17)。

(17)

I. 田辺型	II. 龍神型	III. 阿南型	IV. 京都型
LH(...)	LLH(...)	LLH(...)	(L...)LH
	LH(L...)	L(...)L-H(...)	(L...)LH(L...)
・1 拍目と 2 拍目の間で上昇。	・2 拍目と 3 拍目の間で上昇。 ・LH(L...)はずれない。	・原則 2 拍目と 3 拍目の間で上昇。 ・形態素境界があればそこで上昇。	・核のある拍で上昇。 ・無核なら文節末で上昇。

中央式の低起式音調は、I. 田辺型 $O[OO(...)] \rightarrow$ II. 龍神型 $OO[O(...)]$ を経て現代の京都型のような遅上りになった(上野善道 1987: 17)。この変化に核の有無は関係ないとされる(同上)。文献でも、田辺型は『補忘記』、龍神型は『平家正節』の体系と対応し、その存在が確認できる(金田一 1960, 上野和昭 2011)。また、龍神型と京都型の間間的な型として、徳島県徳島市南部～阿南市に見られる III. 阿南型がある(中井ほか 1999, 大和 1993)。現在 IV. の京都型である全ての中央式諸方言が I. \rightarrow II. \rightarrow III. \rightarrow IV. と変化したとは限らないが、類似した段階を経た可能性はある。

複合名詞では境界での上昇が見られることから、沼島方言も III. の阿南型の段階を経たと推定される。一方で、沼島方言では無核の場合常に一拍卓立となることから、遅上りへの変化は無核語が先行したと考えられる。また、沼島方言では前部要素 X が 1 拍の場合に複合語の境界で上昇しないことから、龍神型 $OO[O(...)]$ を経てから有核と無核で上昇の遅れの進行に違いが生じたと推定する。

(18) $*O[O(...)] \rightarrow *OO[O(...)]$	$\rightarrow(O...)O[O]$	単純語無核
	$\rightarrow O-(...)O[O](...)$	複合語前部 1 拍
$\rightarrow *O(...)O-[(...)]O$	$\rightarrow(O...)O-(...)[O]$	複合語無核
$\rightarrow O(...)O-[(...)]O(...)$		複合語有核

このように変化すると、2 拍以上が高くなり得るのは複合語有核の場合だけである。このような体系上の不均衡を解消するため、 $L(...)L-H(...)HL(...) \rightarrow L(...)L-HL(...)$ という変化が生じたのが京都型と推定する。

現代京都方言の複合語アクセントは、後部が 3, 4 拍の場合、Y の頭に核があるのが基本で

ある(中井 2002: 25-26)が、京都方言も沼島方言のような段階を経たと考えれば、複合名詞の「苺畑」L4 や「罪滅ぼし」L3 のようなアクセントは、沼島方言に見られる*イチゴ[バタ]ケから、無核の遅上りに合わせ1拍のみ高い型に変化した可能性がある。また、「おにぎり」、「お神輿」、「火曜日」、「小刀」などL3の語は、龍神型の段階で一拍卓立 *○-○[○]○ だったために核の位置をずらす必要がなく、L2に変化しなかったことになる。

核の有無で変化が異なった可能性として、京都方言の複合名詞ではYが3拍でH2の語に由来する場合、低起式であれば○(...)-○[○]○の2単位形(L0+H2)になる(中井 2001: 18)。なお、同辞典によれば「俄か庭師」ニワカ[ニワ]シ~ニワカニ[ワ]シのような揺れが見られる。

複合動詞の2単位形のうち、(11)は語を構成する要素の本来のアクセントが残存し、古態を留めている状態と言える。(13)や(14)の2単位形も、連用形の無核化が生じるなど変化はあるものの本来のアクセントが反映されたものと推定されるが、(15)を参照すると複合名詞と同じく核の有無が2単位形の残存に影響していることが分かる。京都方言でも、「隠し続ける」カクシツズケ[ル]に対する「隠し続けた」カクシ+[ツズ]ケタのように、有核の場合に複合動詞で2単位形が現れる傾向がある(中井 2001: 26)。大和(1999)によれば、徳島市方言(中年層)の複合動詞のアクセントは(19)のようになっている。

(19)	ル形	タ形
折り畳む, 噛み砕く	○○-○○[○]	○○-[○○]○○, ○○-○[○]○○
閉め忘れる, 逃げ遅れる	○○-○○○[○]	○○-[○○]○○
逃げ回る, 書き回る	○○-○○[○], ○○-[○○○]	○○-[○]○○○, ○○-[○○]○○
歩き終わる, 作り終わる	○○○-○○[○], ○○○-[○○○]	○○○-[○○]○○
歩き疲れる, 作り始める	○○○-○○○[○], ○○○-[○○○○]	○○○-[○○]○○

いくつか条件があるが、大和(1999)は「L式動詞のタ形で3+4以上の長さの構造を持つものは【中略】2単位形のアクセントが現れやすい【中略】。全般的に、有核の活用形は2単位のみ、無核の活用形は2単位と1単位との併用になっている」(p.24)と述べる。Xが短いと独立しづらい点、核の有無が条件に関わる点など沼島方言の複合動詞に類似する。

複合形容詞の2単位形の場合も、語を構成する要素の元のアクセントを完全に保持しているわけではないが、前部要素の(低起)式が保たれているなど本来のアクセントの影響が見られる。複合動詞や複合形容詞は基本アクセント(動詞は特にH0とL0、形容詞は3拍H1、4拍以上H-2)への統合の影響を強く受けつつも、なお一部の語に2単位形が見られ、独立した2語だったものが一語化する過程を現に示し、統語、形態とアクセント単位との不一致が生じてい

る状態にあると言える。

5. まとめと課題

沼島方言には共時的に不均衡な2単位形が複合語、疊語の副詞、助動詞などに見られるが、これらは通時的に中央式の古い段階のアクセントを何らかの形で反映するものと考えられる。

特に、助動詞「じゃ」のアクセントは、他の中央式諸方言が共有する改新が沼島方言に生じていないことをどう位置付けるかが問題となる。中澤(2014)では、沼島方言を淡路島方言とともに淡路方言に属する方言とみなしているが、淡路島方言との関係を含め、そもそも沼島方言の位置付けに関しては議論の余地があると言える。複合名詞、複合動詞の2単位形は一部の淡路島方言にも見られ、周辺方言とも地理的にある程度連続した分布を示す。複合形容詞については淡路島方言では基本形に統合していて、2単位形が存在した証拠は見られない。

このように、沼島方言のアクセントが中央式諸方言の古態を留めていると見られる一方で、沼島方言から推定されるアクセント変化の仮説に合わない例も見られる。中井(2003)によれば、無核は早上り((17)の I.や II.)ながら、有核の場合にむしろ一拍卓立となっている方言がある(中西 1999)。これは無核で一拍卓立が先行したという本稿で示した仮説の反例となる。沼島方言で推定したアクセント変化がどこまで有効か詳しく調べる必要がある。

本稿では、沼島方言のアクセントについて、2単位形を中心に取り上げ、共時的な音韻解釈を行ってから、通時的な位置付けについて考察した。その結果、本来のアクセントを失い1単位化していくという沼島方言のアクセント変化を確認し、中央式諸方言のアクセント史を描く貴重なデータを提供することを示したが、一方で沼島方言を中央式諸方言にどう位置付けるべきかや、沼島方言で推定した流れに合わない他方言の実例をどう扱うかといった問題が残った。これらは中央式諸方言が含まれる近畿方言、四国方言の方言区画論などを含め、歴史的系統関係の整理・考察という形で今後の課題としたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたって長期にわたり協力してくださった話者の方々に厚くお礼申し上げます。

記号一覧

‘○’: 拍 ‘[’: 拍の上昇 ‘]’: 拍の下降 ‘]]’: 拍内での下降 ‘-’: 形態素境界(接辞と接語は区別せず) ‘+’: アクセント単位境界 ‘(...)’: 省略可能 ((○...)も同じ)

引用文献

上野善道(1985)「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(1)」『日本学士院紀要』40(3): 215-250.

- (1987) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)」『日本学士院紀要』42: 15-70.
- (1992) 「昇り核について」『音声学会会報』199: 1-14.
- (1997) 「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」杉藤美代子 監修『日本語音声 2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』: 231-270. 東京: 三省堂.
- (2006) 「日本語アクセントの再建」『言語研究』130: 1-42.
- 金田一春彦 (1960) 「国語のアクセントの時代的変遷」(金田一春彦 (2005) に所収)
- 金田一春彦 (2005) 『金田一春彦著作集 第九巻』東京: 玉川大学出版部.
- 鈴木豊 編 (2003) 『日本書紀人皇巻諸本 声点付語彙索引』アクセント史資料索引 19.
- 中井幸比古ほか 編 (1999) 『徳島市方言アクセント小辞典』神戸: 神戸市外国語大学.
- 中井幸比古編 (2001) 『京都市方言アクセント小辞典』神戸: 神戸市外国語大学.
- 編著 (2002) 『京阪系アクセント辞典』東京: 勉誠出版.
- (2003) 「アクセントの変遷」上野善道 (編) 『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』85-108. 東京: 朝倉書店.
- 中西信弥 (1999) 『西陣織屋ことば辞典』京都: ウインかもがわ.
- 中澤光平 (2011) 「淡路島方言における『助詞「が」・「は」の融合形』とその音韻的解釈」『日本方言研究会第92回研究研究会研究原稿集』: 1-8.
- (2013) 「南あわじ市沼島方言の複合語アクセントから推定される低起式音調の通時的変化」『2013年度日本語学会春季大会予稿集』: 61-68.
- (2014) 「地域差に基づく淡路方言の下位区分の試み」『東京大学言語学論集』35: 187-216.
- 大和シゲミ (1993) 「低起式の音声的変種—徳島県阿南市宝田町の場合—」『待兼山論叢』27: 37-50.
- (1999) 「徳島市津田・新居浜地区のアクセントの内省報告」(中井ほか 編 1999 に所収)

Two-Unit Forms of the Accent in the Nushima Dialect

NAKAZAWA, Kohei

koheinakk@12.alumni.u-tokyo.ac.jp

Keywords: Nushima dialect, accent, two-unit forms, compounds, archaic forms

Abstract

This paper describes the accent system of the Nushima dialect (spoken in Nushima island, Minami-Awaji City, Hyogo Pref.), focusing on two-unit forms, based on the obtained data from the author's fieldwork, and discusses the genealogical position of this dialect.

In terms of the accent system, the Nushima dialect belongs to the Chuo-shiki (aka Keihan-shiki) group just like the mainland dialects of Awaji-shima, yet the Nushima dialect has some two-accentual-unit forms which other Chuo-shiki dialects including the Awaji-shima dialects do not have.

Synchronically, these two-unit forms are irregular in the accent system, but diachronically, they can be regarded as reflecting the old stage of the Chuo-shiki accent, indicating that the Nushima dialect branched from other Chuo-shiki dialects in an early stage.

(なかざわ・こうへい 東京大学大学院博士課程)